

第 64 回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(生理学・医学関連分野)

所属機関・部局・職名: 筑波大学・生命環境科学研究科・博士後期課程

氏名: 木越 悠

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

連日午前中に行われた講演のテーマは、幅広く、ノーベル賞を受賞した仕事の話の他、最近取り組んでいる研究や、研究のスタンスや着想についてお話される方もいた。エネルギーで笑いをとる方も、淡々とお話しする方も、サイエンスを愛していることが伝わってきた。様々なスタイルにもかかわらず、どの発表も魅力的でわかりやすく、時にはエンターテインングで、プレゼンテーションのテクニックとしても参考になった。

全体的に見て、ブレークスルーとなった研究の発端は(わかりやすくするためかもしれないが、)きわめてシンプルな質問から始まっているというような印象をもった。また、当時のノートの写真を見せてくださった方もいて、研究の視点やプロセスに接することができ、自分がどのような研究テーマを設定すべきか考えさせられた。

また、Schekman 先生は最後の方でどのようなジャーナルに論文を出版するかについての見解を述べており、今現在の雑誌のインパクトファクター重視な科学社会に対する疑問を述べていた。また、Ciechanover 先生の“どの雑誌に出版するかではなくて、その内容が大事”だという言葉には、考えさせられた。また、Marshall 先生は論文がリジェクトされた時の出版社のコメントを見せてくださり、新しい発見に関する論文は受理されにくい時があることを感じた。論文の掲載雑誌のバリューと論文の質双方とも大事ではあるが、今後研究を続けるにあたり、常に考えて行かなければいけない点であると思った。

一番最後の発表者となった Smithies 先生の発表はとても刺激的であった。どのようなきっかけで科学が好きになり、どのように着想して研究をしていたのかを丁寧に、笑いをとりながら説明しており、なによりもあの年でまだ現役で実験を行っているということに勇気もらった。若手研究者へのアドバイスが惜しみなく込められていた発表であった。中でも“大切なことは大事なテーマをやることではなくて、面白くて、楽しめることをして、Good Science を学ぶことだ”という言葉が特に印象的で、今後研究して行く上で大切にしたいスタンスだと思った。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

毎日午後には、午前中発表した受賞者がリンダウ島内にある小規模会場へと移り、若手研究者とディスカッションをするセッションがあった。私は Evans 先生、Yonath 先生、Agre 先生の質疑応答を中心に行われたセッションに参加することができた。その他にも Dinner の時には自分が現在研究を行っている分野を切り開いた Ciechanover 先生と一緒できた事は個人的に良い思い出になった。その席で先生は、ノーベル賞受賞後、出張や仕事が増えたものの、根本的には何も変わらないと言っていて、受賞をあくまでも研究の通過点として捉えているということが印象に残った。

Evans 先生のディスカッションは質疑応答を中心に、現在のファンディング状況や論文の掲載方法、評価方法など研究にまつわる様々な問題について幅広く議論していた。このセッションでは参加者も積極的に発現していて、いろいろな意見が聞けた。このような議論を活性化する力や、より積極的に参加する癖を身につけたいと感じた。Yonath 先生のディスカッションでは、特に女性研究者のワークライフバランスについての議論が印象に残った。その場に居た女性参加者からはその観点からの質問も多く、家庭も研究もどちらもパワフルに取り組んでいる Yonath 先生の話には励まされた。Agre 先生は科学外交や感染症対策などの人道支援にも積極的に取り組んでおり、科学の、研究以外の側面からの社会貢献についてのお話がとても印象的であった。科学者の国際社会において国境を超えたコミュニティーの一員としての社会的役割や、どう貢献していけるのかを意識させられた。

総じて、設定されたディスカッションの場以外でも、どの受賞者も休憩中や食事中などでも話しかけやすい雰囲気を作っており、直にノーベル賞受賞者と話すことのできる貴重な経験となった。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

期間中はどこの会場、場面でも他の参加者と交流しやすい雰囲気が保たれ、実際に皆積極的に交流している印象だった。普段の生活では自身の研究とは違うフィールドの人と関わりを持ちにくいので、異なるフィールドの科学者と様々なことを議論できたことが楽しかった。参加者は皆科学者であったが、医学生、アカデミアを目指している学生、ポスドク、企業へ就職する人、独立してグループを持っている人など様々で、キャリアパスやバックグラウンドが多様で色々な情報を得ることができた。是非自分の今後に役立てたいと思う。

同世代の参加者とは悩みや焦りについてよく話題になり、どれも自分の悩みと似ていて、互いに共感できた。特に印象的だったのが、現在政情不安定な地域出身の参加者は研究や自身のキャリアについては自分と似たような悩みや考えをもっていたが、科学のありかたや国や社会の中での立ち位置、貢献などについてかなり具体的に議論をしていた。これは決定的に自分の中では成熟していない視点だったので考えさせられた。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本からの参加者は皆さん他国の参加者に劣らず個性的だったが、オープンで親しみやすく、研究だけでなく色々なことを深く議論できた。皆さん本会議で初めて知り合ったのだが、最後にはずっと前から知っているように思えるほど濃密な時間を過ごさせてもらった。同世代といっても、たどったキャリアパス、現在のポジションや研究のバックグラウンドも多様で、このような知り合いを作る機会があまり無かったため、刺激的な出会いとなった。特に、現在ポスドクをしている方々からは国内・海外ポスドクの実情やそこへのキャリアパスな話を聞かせてもらい、自分の今後を考える上とても参考になった。

今後もぜひ連絡を取り合い、交流を深めていきたいと思う。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

様々な分野の若手研究者と知り合いディスカッションし、連絡先を交換することができた。具体的な共同研究や交流には至っていないが、自分と似たテーマを異なる方法論で取り組んでいる人とも知り合ったので、今後機会があれば彼らにアプローチしてみたいと思う。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

リンダウ会議への参加は、研究や科学に対する考えを見つめ直すきっかけとなった。特に科学が社会的に担えるもの、担うべきものは何なのかを考えていきたいと思った。今後は研究者として研究成果をあげるのはもちろんのこと、本会で得られた経験を他の研究者や下の世代に広めることで、視野の広いコミュニティーの形成に貢献したいと考えている。日本国内において、一般社会と科学コミュニティーの間のコミュニケーションの不十分さを感じずにはいられない。サイエンスコミュニケーションの難しさと大切さは最近よく議論されているが、根本的に科学の面白さと重要性についての認識がかみ合っておらず、互いに誤解していることが(特に科学に対する誤解が)多いと思われる。この理解の壁は研究コミュニティーがその閉鎖的な性質から抜け出し、よりオープンに視野を広げることで少しずつ壊し、国内における科学への興味と理解へのハードルを下げるのではないかと期待している。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

普段の生活で体験できない、多様性に富んだ環境で、刺激的な出会いの連続でした。ノーベル賞受賞者だけでなく世界中の科学者と出会える、まさに Once in a Lifetime な経験となりました。ノーベル賞をとらない限り、私たち研究者は人生に一度しかリンダウ会議に参加できないそうです。その一度のチャンス、ぜひチャレンジして掴んでください。そして参加するときは積極的にアプローチし、大いに楽しんでください。